な時は遅い人に足並みをそろえてくれます。ほかの訓練でも、みんなで同じことをすれば早くできる人もいるし、最後になる人もいます。その場合は、みんなでその最後の人を手伝います。隊全体で協力し、それぞれの得意を活かして、個人の体力や能力の差を補い合いながらやっていく、そんなことを自衛隊で学びました。自分は苦手なこともあるけれど、射撃や筆記が得意だったので、そこを磨いていこうと思ってやっていました。

自衛隊には女性隊員が少なく、自分がいた小隊は、特に少なかったですね。でも、災害派遣の時などは一般の人に関わることもあるので、女性や色々な年代の自衛官がいた方が良いと思います。対応できることも広がりますから。

お笑いの仕事が忙しく、お休みしていましたが、令和6年の春頃から、予備自衛官に復帰します。芸人として活動しながら、訓練にも参加する予定です。災害時などの必要な時に、少しでもお役に立てたらいいなという気持ちでいます。

お笑い芸人やす子はどのように誕生しましたか？

自衛隊を除隊した後、中学校の用務員として働いていた時、友人に「一緒に漫才をしよう」と誘われました。

嫌なことは嫌でいい。あなたの世界は、もっと広いですから！

お笑い事務所に履歴書を送った後に、その友人が面接をドタキャンしまして、そこからピン芸人です。最初は本当に嫌々芸人をやっていました。でも、先輩芸人が裸一貫でお客さんを笑わせる姿に感動して、そこから「何か芸人ってかっこいいかも」と思うようになりました。お笑いへの意識が変わり、いざ真剣にやるぞと思うと、本当に苦しいですね芸人って。でも正解がない世界で試行錯誤していくのは、アクティブな自分に合っているみたいです。

今、ラップや漫画にも挑戦しています。多忙ではありますが、やりたいことはやりたいと思っています。こどもの頃は「できない」とあきらめてきたけど、やりたいことをやるようになり、それが色々と良いことにつながっている気がします。人生いつからでも始められる、年齢なんて関係ないって思うようになりました。

自分の経験から伝えたいことは？

昔から自分がイジられキャラだったからこそ思うのですが、イジリって本当は難しい。芸人はプロなので、今、みなさんにイジっていただくのは楽しくて居心地が良いけれど、イジられた本人が嫌な気持ちになるなら、それはだめです。学校や身近なコミュニティだけが世界の全てのように感じられて、「失敗したら終わりだ、笑って受け入れなきゃ」と思ってしまうことがあるかもしれません。でも全然そんなことないです。「つらいな」とか「嫌だな」って思う何かがあるのなら、嫌だと言っていいし、距離をとっていいんです。一方で、自分自身の好きなことや得意なことを伸ばして成功している人は、たくさんいます。つらい世界が全てと思わず、どうぞ休んで、周りにちょっと目を向けてみてください。あなたの世界は、もっと広いですから。

※このインタビューは、令和5年12月1日に行いました。